**№34　テーマ『人間としての本物とは何か』**

**講話日2009年1月26日**

**皆さん、こんにちは。今年に入って最初の勉強会ですので、新年あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いします。本当に世情は急激な景気の後退で非常に困難な状況が多々あると思うんですけど、多分今年が景気の底になって来年からは少しずつまた良い方向に向かっていくような傾向になってくると思いますので、今年一年いろいろご苦労、困難が降りかかってくるでしょうけども、是非気を落とさないで難関を切り抜けていってもらいたいと思います。今日は「人間として本物とは何か」というテーマでお話をさせてもらいたいと思います。これからは経済の世界もお金を目的にする活動から、経済活動を通して自分の人間性を磨いていくという労働の目的、経済活動の目的というものが、これまでとはガラッと違ってくる転換点が今年ではないかと思うんですね。これは、今回のアメリカ発の金融恐慌というものを契機にして、ヨーロッパにもその影響がいき、サルコジ大統領が経済の在り方そのものを根本から変えていかなければならない、ということを会議のたびに言っておられました。そういうことを考えても、明らかにこれまでの金を目的にする経済の在り方というものは破綻して、これまでの労働の仕方は過去のものとして終わった…ということが鮮明に意識されるような状況であります。これからは何を目的にして我々は働かなければならないのか。その新しい目標として、我々は仕事を通して自分自身を成長させ、仕事を通して自分の人間性を磨き、豊かにしていく。そのことがこれからの労働あるいは経済活動の究極の目標だという認識で我々は仕事を考えていかなければならないと思います。どれだけ金があっても、人間性が貧しければ、結果として金ゆえにさまざまな問題を抱え、不幸になってしまう。そういう人が多いわけですね。だけど人間性が豊かであれば、金は必ずいい目的のために使われるということになっていきますので、必然的に自分も幸せだし、周りの人も幸せにしていくような金の使い方ができるわけであります。その意味においても、我々はこれから自分の人間性を豊かにし、自分の人間性を成長させていくことを何よりにも増して人生の目的として意識しなければならないと思うんですね。そうすることによって家庭も幸せ、また会社の人間関係も幸せ、結果として多くの人から慕われて仕事もうまくいくということになってきますので、ぜひ人間性の豊かさ、人間性を成長させることを意識しながら、いろんなことをやってもらいたいと思います。**

**そういうこともあって今日は年頭にあたって、新しい時代の理念、新しい時代の目標という観点から、人間として本物とは何なのかというテーマでお話をさせてもらいたいと思います。なぜ人間として本物とは何なのか、そういうことを我々は考えなければならないのか。なぜ人間に本物と偽物がある意識を我々は持たなければならないのか。そのことからまずお話をしていきたいと思います。今は個性の時代で、人間に本物とか偽物とかを別に考えなくてもいいのでは、個性なのだからどうでもいいのでは、ということを感じて生きている人も結構多いと思うんですけど、個性は個性として大事なことなんですけども、やはり人間の在り方としてちょっと首をかしげるような問題だと思えるような方もいらっしゃいます。また人間として尊敬できるような方もいらっしゃるわけなので、そういうところから我々が人生を生きる上で人間として最低限度、踏まえなければならない人間としての生き方の基本、というものがやはりなければ同僚からも尊敬され、お客さんからも尊敬され、また家庭においても皆に慕われる人間になることはできません。そういう意味で、どうして我々は本物を目指す生き方をしなければならないのか。その理由が3つあります。**

**まず、なぜ我々は本物を目指すということを生き方の基本に持っていなければならないのか。その第一番目の理由は、人間というものは他の動植物とは違った独特の命の形を持っている。命の形は何を意味してるのか。どういう能力、どういう内容というものを命の形の中に持っているのか。そのことによって命の形は違ってくるわけであります。生物は皆、その種ごとにいろんな命の形を持っているわけですけど、その命の形というものがその生物が持っている能力とか、その生物が持っている可能性と言うか、どういう生き方をする生物なのかを命の形というものを端的に表現しているわけであります。これを哲学の表現からすると、「形は内容の表現である」という言葉を使います。形は内容の表現である。形を見れば、その中に込められたさまざまな内容が見えてくる。機械なんかでも、その機械の機能が違ってくると形も違ってくるわけですよね。新しい機能が機械に加われば、確実にその機械の形は違ってきます。形というのは、その中にどういう内容が込められているのか、どういう内面的なものが存在するのかということを形自身は表現しているわけです。そういう意味で、人間というのは皆人類として、人間としての共通の命の形で持っております。だからその共通の形を持っているということは、人間の内容として持たなければならないものも全人類共通する基本的な原理というものはあるんだと言わなければならない。その命の形に相応しい内容を持っていなければ偽物。その形に相応しい内容を持って俺は本物と言うことができるわけであります。**

**そういう意味で我々は一体自分の命の形というものがどういう内容を要求しているものなのか、一体どういう内容が命の形というものに存在するか。そのことを知ることによって、我々は人間としての本物の生き方をすることができることになるわけです。だけども命というものは、我々が自分でつくったものではなくて、確実に命の形というものは母なる宇宙の摂理の力によってつくられて、我々に与えられているものであります。命の形というのは、自分でつくったものではない。あらゆる生物は宇宙の摂理に基づいてつくられた形である、ということはどういうことなのかと言ったら、命の形というものにはつくった母なる宇宙の想いと願いと祈りが込められている。人間という命の形も、これは自分でつくったものではなくて宇宙の力によってつくられて与えられたものである。ゆえに我々は、自分の命の中にいかなる想いが込められているのか、いかなる願いが込められているのか、いかなる祈りのもとに自分の命というものが世に生み出されたのか。そのことを知ることによって、我々は母なる宇宙によってつくり出された人間に相応しい本物の人間の生き方というものを知ることができるわけであります。そして一人ひとりには、また時代に生まれてくれば、時代において生きていかなければならない使命が一人ひとりの命に与えられております。ということは、この時代に生まれてくれば、この時代において自分なりに何かしら役割を果たして生きて死んでいかなければならない。どういう役割を与えられて自分はこの時代に生まれてきたのか、そのことを考えることによって自分の個性ある人生というのが描き出されるわけであります。**

**とにかくは、命も自分でつくったものではないし、命に込められた個性というものも自分でつくったものではない。すべてこれは母なる宇宙から与えられたものである。であるがゆえに我々は、人生を生きる上で一体母なる宇宙は、いかなる期待を、いかなる願いを自分の命に込めて自分をこの時代に生み出したのか。それを知らなければ、本当の自分の価値ある人生を生きていくことができません。人間としての本物の在り方というものを知ることも大事なんですけど、自分自身の命にどういう想いを母は込めてこの時代に自分を送り出してくれたのか。それを知ることによって、自分がこの時代に生きる使命というものが明確に分かってくるわけであります。その両面から我々は人生を生きる上で、一体母なる宇宙はいかなる想いを自分の命に込めているのか、それを知る努力をする必要があるわけであります。そのことによって我々は他の動植物ではない、人間特有の生き方というものをしていくことができるようになってくるわけですね。人間として生きることは、命の形に込められた母なる宇宙の願い、祈りというものを実現するような生き方をしていく。そこに人間としての本当の生き方、人間の道に外れない母なる宇宙の期待に応える、母なる宇宙の思いに沿った、自分をつくってくれたお母さんの思いに沿った生き方をすることが人間として本物ということですからね。母なる宇宙はどういう思いを持って自分を世に送り出してくれたのか、ということを知る努力をすることによって、自分の生き方、人間としての生き方というのが分かってくるわけです。我々は犬猫ではない。人間という命を与えられている限りは、人間としての命に相応しい生き方をしなければならない。そういうところから我々は人間として本物の生き方とは一体どういうことなのか、人間として本物とは何なのかを問うていかなければならない必然性が出てくるわけであります。**

**第二番目の理由は、人間は人間に生まれてきても人間になれるかどうかは分からない。人間の子どもに生まれてきても狼に育てられてしまったら狼少年ケンだ。よく昔から人間の姿・形はしていても、人の皮を着た獣という言われ方をすることがあります。人間は生まれてから死ぬまでいかに育てられ、何を教えられるかによって人間というものの内容が決まってくるわけです。人間の子どもに生まれてきても、狼に育てられて狼の習性を脳は覚えてしまったら、人間は人間には戻れないし、人間にはなれない。狼の習性を脳が覚えてしまったら、狼のような生き方、狼のような行動というものをすることになっていく。うっかり猫にさらわれて猫に育てられちゃったりすると、猫少年ニャンになっちゃったりして、ニャーって鳴くかもしれない。そういう可能性も人間にはあるわけであります。これは人間という命の独特の在り方なんで、犬や猫は人間に育てられても人間のような生き方とか活動はしません。犬は人間に育てられてもワンと鳴くしかないし、猫は人間に育てられてもニャーと鳴くしかないんですよ。ということは、人間以外の動植物は遺伝子と本能の支配の下でしか生きられない、という次元の命なんです。人間というのは遺伝支配を超えて、本能の支配を超えて、自由という領域を命に獲得した次元の命の在り方をしているわけであります。であるがゆえに、遺伝子に一方的に支配されたり、本能に一方的に支配されたりしないで、遺伝子や本能の表現の仕方というものを自由に選び取ることができる。だから、ある意味で遺伝子や本能を支配するような自由度を持っているわけであります。遺伝子や本能に一方的に支配されていないからどうなのかと言ったら、生まれてから後の育てられ方、何を教えられるかによって、その人間の人間性が決まり、その人間の在り方は決まる。そういうことになってくるわけです。だから、生まれてから後に狼にさらわれて狼の習性を脳が覚えてしまったら、狼のごとき人間になってしまう。そういうところから人間というのは、生まれてから後にいかに育てられ、何を教えられるかによって、いかようにでも変化するということになってくるわけです。やはりどういう風に育て、何を教えれば人間という命の形に相応しい内容を持った人間になれるのか。ということを我々は考えていかなければならないし、また自分自身もそういう風な意識を持って、自分というものを成長させていくということを考えなければなりません。そういうところから本物としての人間の在り方を目標として持って、そうなれるように生きるということが求められてくる。そういうところからも本物と偽物の違いが出てくるわけです。**

**第三番目の理由は、人間は人格を持って生まれてくるのではない。人間が生まれたときには、動物学上の分類における人類として生まれてくるのである。生まれたときには動物である。そして人間は生まれてから後に人間の格を獲得して人間になる、という生き方をする。だから成人、成人式は人類しかやらないことですけども、成人式というものをする。これは人間になる、という道筋を歩んでいって、そして人間としての生き方ができる状態になって、成人だという風に認めることをするわけですよね。そういう意味で、人間の格というものは生まれてから後に自ら努力して獲得していくものである。では、その人間を格とは何なのかということを我々は求めていかないと、人間としての本当の在り方、本物の人間の在り方というものを自分のものにすることができない、ということになってくるわけですね。とにかく、そのように考えていくと、我々は明らかに本物と偽物ということを意識しながら、自分自身人間としての本物の在り方というものを求めて生きることを、自分の生き方の根本に据えなければならない。個性の時代なんだからどうだっていい、ということは言っていられない。そういうことが学問的な観点から言うことができるわけであります。とにかく一番大事なのは、人間というのは人間という独特の命の形を持っている。形は内容の表現であるから、形に相応しい内容とは何なのかを考えなければならない。その形に相応しい内容を持っていなかったら偽物。その形に相応しい内容を持っていたら本物だ。**

**その内容とは一体何なのかと言うと、その命の形をつくったのは宇宙の摂理の力であって、母なる宇宙の摂理の力だから、我々は人間という命の形の中にどういう思い、どういう願い、どういう祈りを母は込めて人間という生き物をつくったのか。そのことを考えて、母なる宇宙の期待に応える生き方をする。そこに人間としての本物の生き方というものが出てくるわけであります。とにかく、どなたも、一体自分の命にいかなる母の思いが込められているのか。自分の命にいかなる願いが込められているのか。そのことをぜひいろいろと考えながら、自分の人生というものを考えてみてもらいたい。自分の人生を歩んでもらいたいと思います。**

**人間にはそれぞれ皆名前があるわけですけど、親が名前をつけるときには、明らかにそこに何かしらその子に期待する願い、祈りというものが込められているわけです。そういう意味においても、我々はこの世に自分を送り出してくれた両親の思い、あるいは自分の命に込められている宇宙の力を我々は理解しなければなりません。では一体我々が人間の格を持った生き方をするということは、一体どういう内容を目指していくことなのか。とにかく皆さん方も「俺は人間だ」という風に思っているはずです。「自分は人間ではない」とは誰も考えていないと思うんですけど。よくよく原理的に考えていくと、人間としての命の形の相応しい内容というものは一体どういうものなのか、ということをちゃんと分からないで、ただただ何となく社会において与えられるものを吸収して、成長して生きていれば人間としての生き方ができていると思っている方が非常に多いと思うんです。そういう常識的な人間としての生き方というものには、自分自身において明確な自覚、自信を持って「俺は人間だ」とも言えるような根拠というのがないんですよね。現在、非常に高度な教育が学校でも行われていますが、だけども残念ながら我々がこれまで学んできた学校の教科書には「人間の格とはこうだ」ということがちゃんと書いてある教科書がない。とにかく残念ながらまだ現在世界は、人間の格とは何なのか、人間性とはなんなのか、人格とはなんなのかということを知らないで人間教育をしている、という段階であります。だから残念ながら、現在の学校は学校を卒業しても頭は良くなって理性は成長するけども、人間性が全く磨かれていないというか人間性が非常にお粗末な状況であって、その意味では物質的には豊かになったけど人間性は全然成長していない…これが今日の科学技術文明というものの下で生きる人間の在り方に対する反省点と言われているわけです。そういうところからも、これから物質的豊かさというものだけではなくて、人間性を豊かにしていく、人間性を成長させていくということを目標にして、人類は生きていかなければならない。そのことが文明史的には言われているわけであります。**

**その意味においても、これからの学校教育においては何にも増して人間の格とは何なのか、どういう内容を整えれば人間の格があると言えるのか、ということがちゃんと書いてある教科書をつくる必要があります。皆さん方も高等教育をこれまで受けてこられたと思うんですけども、誰一人、「人間の格とはこういうものだ」ということがちゃんと書いてある教科書を見たことがないと思います。人格とは何なのか、人間性とは何なのかということがちゃんと書いてある教科書がない。そういう状況で我々は教育を受けて今日に至っているわけです。であるがゆえに、学校に行っても人間性が成長しない。成長しないと言ったらちょっと語弊があるかもしれませんけども、現在の学校は理性を成長させるための教育というものを主眼にしていて、人間性を成長させ、心を成長させるための教育というものがほとんどなされていない。基本的に教科書はない、というのが大きな問題であります。そういう意味においても、これから学校教育の中に人間の格とは何なのか、人格とは何なのか、人間性とは何なのかということがちゃんと書いてある教科書を、これからつくる段階に人類は入っていくと思うんです。**

**そこでそのたたき台として、感性論哲学では人間の格とは一体どういうものだと考えているのか、そのことをお話しさせてもらいたいと思います。人間が犬猫ではない、人間の格を持った生き方をするためにはどういう条件が求められるのか、ということちゃんと知ってもらいたい。そのことを考えていくためには、まずどういうところから出発するかと言うと、人間が生まれたときには動物学上の分類における人類として生まれてくるということを申し上げました。生まれたときには動物である。そういう段階から、人間が人間の格を持った生き方というものをできるという状況になっていくようにするためには、どういうプロセスが要求されるのか、ということを考えていきますと、人類が最初につくった文化は原始宗教だということ実をまず考えてみなければなりません。人類は原始宗教という宗教と文化を持つことによって、人類は動物の次元から脱却して、そして人間の格というものを持つ可能性を持った命へと進化することができた。なぜ人類は原始宗教という文化を最初につくり出すことになったのか。**

**その経緯を考えていきますと、歴史的なことを言うと、とにかく原始時代というのは非常に激しい活動を地球がしていた時代であって、盛んに地震があったり、火山が爆発したりと天変地異が絶えない。そういう状況の中で人類は生きていたわけですけども、不安な恐怖にかられるような状態で生きていた。そこで人類は、なぜ一体地震とか火山の爆発が起こるんだろうと、理由が分からないと不安なんですよね。なぜ、そういうことが起こるんだろうと。そしてそのときに考えていったのが、こんなことは自分たちがやっているのではない。自分たちができないのだから目には見えないけども自分たちよりもっとすごい力を持った奴がどこかにいて、そういう輩が地震を揺らしたり火山を爆発させたりしているのに違いない。という風に考えたんです。これは擬人的類推といって、理性の使い方の一番原始的な在り方。擬人的類推…人間の言動というものを下敷きにして、人間の言動を通していろんな自然現象を理解しようとする。人間がしていることを通して、なぜそういうことが起こるのかを考える。そして、火山の爆発や地震なんていうのは、自分たちにできないからもっとすごい力を持った奴がどこかにいてやっていると、考えた。そのことによって人類は、目に見えるものの背後に目に見えざるものを見た。目には見えないけども。どこかにそういうことをやっている奴がいるんだという意識を人類は持つことになった。目に見えるものの背後に目に見えざるものを意識し始めて、その目に見えないものが目に見える現実を支配しているんだ。いろんなことをやらかしているんだという着想、発想を持つことができた。ここに人間が動物の次元から脱却して、人間としての生き方ができるようになっていくターニングポイント、エポックメイキング、動物と人間というものが違ってくる出発点があったわけです。**

**人間以外の動植物は目に見える現実に支配されているわけなんですけど、人間は目に見えるものの背後に目に見えざるものを見る力を持つことによって現実に支配されることなく、その目に見えない世界を原理にしながら現実を理解・解釈するという生き方ができるようになっていったわけです。そのことによって人類は、未来のことを意識しながら現実を生きる。目標を意識しながら現実を生きる。ご先祖様のことを考えながら現実を生きる。目に見えないものというものを意識しながら現実を生きるという力を獲得したわけであります。その出発点が原始宗教というものであって、現実の全ての事柄は目に見えない凄い力を持った奴がこういうことをやらかしているんだ、と。その自分たちよりも凄い力を持った存在、それを神とした。自分たちよりももっと上の存在という意味もあって、超越的存在、神・仏というものをイメージすることができるようになっていったわけです。そのようにして人類は、自然現象が一体どういう理由で起こるのか、そういう風な形で理解していった。だからどういうことになったのかと言ったら、地震とか火山が爆発するたびに、それを行っている神や仏という超越的存在の心を休めれば、こういうことをしないであろうと考えて、神を意識しながら踊りを踊ったり、あるいは神に貢物を奉るということをした。これが祭りという、いろんな地方に残っている祭事の発生の発端であります。そういう貢物を奉るとかあるいは祈る、踊りを踊って目には見えないものの心を心休める、気に入ってもらおうとかすることをやったわけです。そういうことをすることによって、だんだんだんだん原始宗教という文化が生まれてきたわけです。これが原始宗教というものがなぜ出てきたのかという歴史的な経緯。**

**もうひとつ、人類がなぜ原始宗教というものをつくり出さなければならなかったのかの重要な理由は、宗教的は信じるという力をつくってくれるものなんですけども、なぜ信じるという力を柱にする文化を人類は最初につくったのか。それは何かを信じないと生きていけない、という命の現実がある。すなわち、生まれてから空気を吸うのであっても、いちいち「この空気は大丈夫かな」と疑っていたのでは吸えませんから。疑うも疑わないもない、吸わないといけませんので、そういう風なことですので、信じないと吸えない。命が生きることの最も根底にあるものは信じるということ。あらゆるものを疑い始めたらもう生きていくことはできない。カレーライス一丁と言って、カレーライスを持ってきてくれて、皆食べてしまうんですけど、これもひょっとしてひょっとしたらひょっとするぞ、と思ったら食べられませんからね。何も食えなくなれば死んでしまう。我々は空気を信じ、大地を信じ、またさまざまな食材も信じ、いろんなものを信じるから生きていくことができる。信じるということは、生きる上で最も根本の大事な能力なんです。皆から不審な目で見られたら、人間は生きていけなくなって自殺をする。不信の目は殺す目だ、信じる目は生かす目だ。最近のように食品偽装で、食べるものが信じられないことになってくれば、本当に大丈夫かと考えながら食べなきゃならんようなことになってきております。そうなれば必然的にやっぱり生きることが非常に不安な状況になって来ざるを得ない。とにかく信じることが生きることの根本の重要な原理なんです。信じるということがないと、生きていけないから信じるという文化である宗教を人類は最初につくらざるを得なかった。**

**そういう意味では今日、さまざまな宗教が存在しますけど、宗教という文化が存在する最も大きな存在価値というのは、信じて生きるという力を人間につくってくれるところに、宗教という文化の最も大きな人間における価値があるわけであります。とにかく、なぜ原始宗教というものを人類が最初につくったのか、自分の身の回りに起こるでき事がなぜ起こるのかは分からない…これほど不安で恐怖はない。そこで自然現象を理解するために人類は原始宗教をつくって、目には見えないけども神や仏はいて、そういう人そういうものが現実を支配しているんだと考えた。「そうなのか」ということになって、神や仏の気に入るようなことをしてあげれば、人間に災いをもたらすことはないだろうと。神や仏の気に入らないようなことを人間がすると、病気になったりあるいは地震で死んでしまったり、そういうことになってしまうんだと。そういうところから、宗教はつくられてきたわけです。もうひとつは、信じないと生きることができない。そういうところから信じる文化としての宗教をつくって、信じる心をつくることになっていったわけであります。とにかく人類は、原始宗教をつくることによって動物の次元から脱却して、人間としての生き方というものをつくり出していったということなんですよね。**

**もうちょっと学問的な根拠を申し上げますと、人類の歴史というのは大体400万年ぐらいあると言われているんですよね。400万年ぐらいあるという人類の歴史の中の380万年は、旧人の段階すなわち人間も動物と同じような生き方をしていた段階と言われております。人類が人格への可能性も必要な生き方をし始めたのは、約20万年ぐらい前からだという風に言われている。その根拠は一体何なのかと言ったら、20万年よりも古い地層から出てくる人骨には、宗教的儀式をして死者を葬った痕跡がない。しかし20万年前から今日の地層から出てくる人骨には、宗教的儀式をして死者を葬った痕跡がある。と、人類考古学では言われているわけであります。宗教的儀式をして死者を葬ったということは、宗教があった。人類が神というものを意識しながら生き始めたということの証明。そう考えると、人間が動物とは違う生き方をし始めたのは約20万年ぐらい前からである。しかも動物とは違う生き方というものができるようになったのは、原始宗教という宗教を持って神というものを意識しながら生き始めたからだ、と言うことができるわけであります。ここから人間としての生き方がだんだんとつくられていったと考えることができます。**

**どのようにして人類は、原始宗教を持った後どういう風にして人間の格というものをつくっていったのかということを考えていきますと、原始宗教でも宗教というのはすべて神と超越的な存在というのを意識するわけなんですけども、そのことによって人類は自分はそういう超越的存在、神ではないという意識を持ち始めるわけであります。神を考えることによって、自分はそういう偉大な力を持った存在ではない。神とか仏と言われるものは、超越的存在、絶対的存在、完全な存在という風に考えることになっていくわけなんですけども、人間はそんな神や仏のような完全な存在ではない。そういう意識が宗教というものの中から出てきます。そういうことからだんだんと人間は不完全な存在なんだ、という自己認識ができ上がってくるわけなんです。ここに人間とは何なのか、ということを考え始める最初の段階があるわけです。すなわち、人間が人間の格を内容として持つためには、まず第一番目に何が必要なのかと言ったら、我々人間は不完全だということをちゃんと知る。不完全性の自覚というものがあることによって、人間は動物とは違った存在になることができるんだ、ということが分かってくるわけであります。人間が人間の格を持って生きる最初の原理は、不完全性の自覚であるという風に言わなければならない。原始宗教というものを人類が持つことによって、つくってきた自己認識。人間とは何なのかということに対する最初の考え方であった。我々が人間として人格を持って生きていこうと思ったら、最初に自分の命の中に持たなければならないものというのは、不完全性の自覚であると言うことができるわけであります。「俺は不完全だ」ということをいつも忘れない。常にそのことを自分の心に置いて生きる、というところに動物ではない人間の格というものの基本がある。**

**なぜ不完全性の自覚はそんなに大事なのか。それは、不完全性の自覚、自分は不完全だと意識することができるのは人間だけであって、神様にも動物にも不完全性の自覚は持てない。不完全性の自覚は、人間にしか持てない自覚である。だから、人間が本物の人間にあるためにはどうしてもこの自覚が必要なんだ。なぜ、神にも動物にも不完全性の自覚が持てないのか。それは、神は完全かつ絶対な存在だから、神が自覚を持つならば完全性の自覚でなければならない。神がうっかりしちゃったりなんかして、神様が「人間の持てるような自学を俺が持てないはずはないではないか」と考えてしまっちゃったりなんかして、神様が不完全性の自覚を持ってしまったら、神でなしになっちゃいますからね。そういうわけにいかん。神様が自覚を持つのならば、完全性の自覚でなければならない。動物はどうか。動物は人間と同じように不完全な存在なんですけども、動物は神と仏とかというものを意識することができない。だから自分はそんな完全な存在ではないという自覚ができない。意識できない。人間も動物も皆不完全なんですけども、だけども「俺は不完全だ」という意識を持つことはできるのは人間だけであって、動物にはその意識はない。だから、人間が本物の人間であろうとするならば、人間にしか持てない自覚を持たずして、どうして人間として本物と言えようか。まず人間が人間の格を整えていこうと思ったら、最初に持たなければならない、命の中につくっていかなければならない自覚は、不完全性の自覚である。これなくして人間は誰も人間の格を自分のものにすることはできません。**

**だけども、不完全さの自覚というものはそれが自覚に終わってしまったのでは、単なる知識である。本当に人間性として、それが身に付いたものになっていくためには、単なる知識で、観念で終わってしまってはならない。技術なんかでも、勉強して学んだものというのは、それを使うときにいちいち考えながらその手足を動かさなければならない。単なる知識の段階が終わって、その知識が身につけば、考えなくても手足が勝手に動いてしまう。そういう状態になったときにその知識は身についたと言われるわけです。その内容が命に染み込んで身につけば、ひとりでに手足が動く、滲み出てくるというのはそういう風な考え。自然に湧いてくるという状況になって初めて自分のものになったと言えるのであって、いちいち考えながらしている分には、まだ身についてない。本当にまだ自分のものになってない、とよく言われるわけです。だから、不完全性の自覚というものも単に不完全だということを自覚し、意識しているだけではまだそれは観念であって、身についたものとは言えない。自分の人間性になっていないと言うことができます。**

**では、不完全性の自覚というものが身についていったらどうなるか。不完全性の自覚から滲み出る謙虚さが出てくる。謙虚さというものが命から滲み出てきて初めて、自分のものになった、身についた、人間性となったと言うことができるわけであります。謙虚さと言っても、「謙虚にしなくては」と言われて謙虚にするということがよくあるわけで、商売している場合でもお客さんに対しては謙虚にしなくては、と思って謙虚に親切に対応する。ということをしていると、相手が客ではないと分かった途端に傲慢になり、変身といって全然変わってしまう、そういう人もいるわけですよね。謙虚さというものを商売の道具に使っている、すなわち人間性ではなく、単なる知識として謙虚さを知っているだけの話であって、それは謙虚さがまだ飾りなんですよね。飾りじゃないのよ涙は、ですから。中森明菜と申しましょうか。だから、滲み出て来なければ本物ではない。相手が客であろうとなかろうと、常に人間としての在り方というものを見失わない。常に謙虚な対応ができる状況になって初めてその謙虚さは身についた。不完全性の自覚が命に染み込んだと言うことができるわけであります。とにかく、不完全性の自覚から滲み出る謙虚さが、人間がまず身につけなければならない人間の格の第一原理だということをぜひ分かってもらいたいと思います。**

**その根拠は何なのかと言ったら、不完全性の自覚を持つことができるのは人間だけであって、神にも動物に持てないんだ。だから人間が本物の人間であろうとすれば、この自覚を持たずしてどうして人間として本物と言えるか。不完全性の自覚こそ、人間の格を示す第一原理だと言うことができるわけであります。では、どうすれば不完全性の自覚というものが命に染み込んで、謙虚さというものが命から湧いてくるのか。人間の格というものが身についたという状況になることができるのか。どうすれば謙虚さが滲み出てくるという人間になれるのか、ということを次に考えないといけません。**

**命から謙虚さが滲み出てくるという状態に人間が成長していくためには、ふたつの重要な課題があります。まず第一番目は、人間は不完全だということ。人間は誰でも長所短所が半分ずつある。人間誰でも長所半分短所半分という構造で人間性が成り立っている。そして短所はなくならない。長所もなくならないけど短所もなくならない。長所半分短所半分、両方とも半分ずつあって初めて人間なんだという認識を持たなければなりません。短所というのは他人から嫌われ、他人から非難され、他人から嫌がられるものが短所というに言うことができるものです。そういうものを人間である限り、どんな立派な人間でも必ず半分持っているんだ。どんな立派な人間でも必ず他人から嫌われて、軽蔑されるようなものを皆半分は持っているんだ。それが人間なんだという人間観をまず持つ必要があります。そしてそれは、自分の中にもあるんだ。どんな人の中にもあるんだという人間観を我々はまず定着させていかなければならない。**

**なぜ人間性というのは、長所半分短所半分という構造で成り立っていると考えなければならないのか。その根拠は何なのかと言ったら、人間も大宇宙の中に存在する一個の命である。すなわち、我々も大宇宙の一部分なんだ、我々も宇宙なんだ。宇宙とは何なのか、宇宙はマイナスのエネルギーとプラスのエネルギーがエネルギーバランスを模索しながら宇宙の秩序をつくっている。そういう宇宙の摂理と言われる現象があります。そして宇宙は、マイナスのエネルギープラスのエネルギーがお互いに協力し合いながら、いろんな現象をつくり出す。宇宙の中に存在するあらゆるものは、すべて宇宙によってつくられたものです。だから宇宙の中に存在するすべてのものは、バランス作用、調和作用、バランスを求めていく、調和を求めていく、平行作用というものが宇宙の働きの基本になっているわけです。その力で宇宙の中に存在するあらゆるものは、つくられてきました。だから宇宙の中に存在するものは、基本的に皆バランス作用、調和作用というものを命の中に持って生きています。これはどういうことなのかと言うと、人間も宇宙によってつくられた命ですから、だからその神経系、交感神経、副交感神経があってバランスを取っている。栄養摂取でも空腹と満腹でバランスを取って栄養摂取している。人間の命の形も、あらゆる生物の命の形もだいたい左右シンメトリーに近いバランスの取れた形になっている。植物なんかは根っこと幹の部分でバランスを取っている。あらゆるものは、皆バランスを取って、そういう働きを持って存在しているわけであります。**

**宇宙の中にある星はなぜ皆丸いのか。それは三次元という構造の中で、完全なバランスを追求していくと球体になるんです。球というのは、中心点から全ての面が等距離にあるもので、完全なバランスというのは球なんですよ。けれども、あらゆるものは不完全ですから、完全な真ん丸はどこにもなくて、皆楕円形であったりいびつな形をしている。だけども、丸くなろうとする傾向性は皆持っています。だから、星は丸くなろうとする。だから、星は丸い。やはり、これもあらゆるものはバランスを追求する働きを持っているということの証明であります。宇宙の摂理があらゆるものを支配していることの最も単純明快な理解の仕方は、我々は何も考えないで気持ちがいいということでセックスをしているんですけども、生まれてくる子どもはだいたい女の子と男の子が約半分ずつ生まれてくることになっているんですよ。めちゃめちゃに女の方が多くなったり、めちゃめちゃ男の方が多くなったりしない。だいたい全人類で考えてみると、だいたい男と女は半分ずついるという状況になってしまうんですよ。これをもって宇宙の摂理があらゆるものを支配していることの証明だという風に言われるわけであります。**

**これは哲学の原理で予定調和と言って、あらゆるものはちゃんと宇宙の摂理によって調和が図られ、ちゃんと予定されているんだ。その予定のもとに皆生まれてくるんだ。予定調和と言う言葉で呼ばれております。これがあらゆるものは約半分ずつ、そういう風なことになってくる根拠であります。男の子と女の子が約半分ずつ生まれてくることが、宇宙はあらゆるものが支配していることの証明であります。人間もやはりその宇宙の摂理のもとでつくり出された命ですから、人間もやはりバランス作用という構造をもって命はでき上がっている。だから人間には長所と短所があるということは、約半分ずつあるんだという風に考えなければならない。短所がめちゃくちゃに多い人もいないし、長所がめちゃくちゃに多い人もいない。皆だいたい長所短所は半分ずつなんだ。だから世間でどんなに尊敬されている人でも、その家の奥さんに聞いたら「あんな人…」になってしまって、「なぜそんな立派なの？」ということになってしまって普通の人になってしまう。長くその人と一緒にいたら必ず自分にとって嫌だなと思うところが半分は出てくる。いいところも半分あるんだけど、必ず短所、嫌なところも半分出てくる。これはもう宇宙の摂理の働きで出てくるもの、宿命です。どんな人と会う場合でも、我々は相手から見たら自分の中には相手から軽蔑したくなるような、相手から見たら非難したくなるようなダメなところが、必ず半分はあるんだと知っていなければならない。また良いところも半分はあるので、どんな人でも相手の中には自分よりも素晴らしいものは半分あるんだ、という意識で人とは接しなければならない。そのことによって、誰をも軽蔑しない、誰をも見下すことはない、そういう謙虚な意識がそこから出てきてくる、湧いてくるということになってくるわけです。**

**そして短所はなくならないんだから、人の短所を発見したら決して責めてはいけない。人の短所を発見したら助けてあげよう、助けてあげたい、助けてあげなくては、と思うのが人間らしい謙虚な優しい心の働きなんです。どんな人にも長所短所半分ずつあるんだから、人間が人間らしく生きようと思ったら長所も短所も生かして使うということをしないと、人間らしく生きることはできません。人間も宇宙の一部分であって、人間も一部なんだから、宇宙と同じことを我々もしないといけないわけであります。宇宙もマイナスのエネルギーとプラスのエネルギーが両方とも活かし合って、助け合って働いているわけですから。我々の中にある長所も短所もそれを生かし合って、助け合って働かせる長所短所の使い方というものを我々はこれから覚えていかなければなりません。これまでのように決して我々は短所をなくしましょうという風に言ってはならない。また人の短所をなくさせる努力をさせてはならない。なくならないものをなくす努力をさせることが相手を苦しめることになってしまう。大事なことは、相手の短所を非難するのではなくて、相手の長所・いいところを見つけ出す。そして、相手のいいところを褒める努力をする。相手のいいところを伸ばしてあげる、伸ばしてあげる努力をする。人間と接する場合には、短所は半分もあってなくならないんだから、なくならないようなものを気にしてもしょうがない。だから、いいところを見つけ出して、相手のいいところと付き合っていく。そういう付き合い方を覚えていかないと、人間らしい人間の格になる生き方というのを我々はすることができません。どんな人にも短所があるんだから、しかもそれはなくならないんだから、それを気にし始めたら人生は貧しい、非常に生きづらいものになってしまう。どんな人にでもいいところは半分あるんだから、いいところを見つけ出して、いいところと付き合わせてもらう。という付き合い方を覚えていかなければならない。短所はなくならないんだから、短所は責めないで許してあげる。お互い短所を責め合ったら人生は地獄だ。人間が人間らしく謙虚な生き方をしようと思ったら、短所をお互いに許し合って、お互いに相手のいいところと付き合わせてもらう。そういう付き合い方を覚えていく。会社の中で人を使う場合でもその人の長所を使わせてもらう。長所を見つけ出して、その長所を伸ばしてあげて、使ってあげる。そういう風な人の使い方というものを考えていかなければなりません。**

**人間関係においては短所が出てきたら嫌われますから、短所はなくならないから無くす努力はしてはいけないけど、出てきたら嫌われるから短所はあまり出て来ないように注意をしましょうね、とお互いに言わなければならない。短所が出てこないように注意をするのも謙虚さなんですよ。そしてその短所を発見したら、誰か助けてあげよう、助けてあげたい、助けてあげなくっちゃと思うのが人間らしい心だ。もっともっと短所を活かして使おうと思ったらどうするか。短所が出てこないように注意をするのではなくて、わざと自覚的に自分の短所をさらけ出す。「俺のダメなところはここなんだ。だから皆助けてくれ」と言って助けを求め、そして自分の短所をさらけ出すことによって助けてもらって、助けてもらったら助けてくれた人に対して「君はすごいね。すごい力を持っている。君と出会えてよかった」と、その人を褒め称えて、感謝をする。そういう対応をする。これを活人力という。相手の存在を輝かせ、相手の存在を活かす力。本当に我々が活人力を使って、相手の存在を輝かせるような生き方をしようと思ったら、自分の短所をさらけ出して助けてもらうという力をつくっていかないと、そういう力を持つことはできません。自分の長所で人を助けてあげるのは立派ですけど、だけども長所で人を助けてあげるだけでは相手を惨めにする。助けてあげることも大事なんだけど、助けてもらうことも大事であって、助けてあげることと助けてもらうことは同等の価値がある。素晴らしい人間的な行為なんだ。だけど、これまでは助けてもらうのではなくて、助けてあげられるような人間ならないといけないと言われてきた。それだけでは、人間の生き方としては半端、偏った生き方であって、助けてあげるだけの人生では結果として、傲慢な慢心を持たざるを得ない。助けてもらって初めて自分の弱さを知り、自分のダメなところを知って、相手を褒め称えることが素直にできるようになる。そのことによって、謙虚な生き方が生まれてくるわけであります。その意味でもっともっと我々は人に助けてもらう力をつくっていく努力をする。そういう美しい生き方ができ人間に成長していく必要があります。助けてあげることも立派だけど、助けてもらうことも人間として立派なことなんだ。助けてあげることと助けてもらうことは、同等の価値がある素晴らしい行為だ。**

**もっともっと会社の中でも上司というのは、自分をさらけ出して部下に助けてもらう、部下に仕事をしてもらうという力をつくっていくことを考えなければなりません。自分のダメなところをさらけ出すことによって、自分のダメなところで優れた力を持ってる部下を使ってあげる。「君はすごい」と言って褒め称えてあげる。そのようにして部下を成長させるわけであります。そういう上司の部下の使い方というのを覚えていかないと、ついつい上司は部下が頼りなく見えてしまうんですよ。自分が長い間仕事をしてきて成長しているものですから、新入社員とかまだ年数が経っていない社員がなんとなく頼りなく見えて、ついつい叱ったり注意したり非難したり、ということが多くなってきてしまいやすい。そうすると部下の方でも、なんとなく仕事をすることに嫌気がさしてしまって、やる気がなくなってしまう。会社の仕事の能率が落ちてくるだけではなくて、ついには人間関係がまずいと言って辞めてしまうということになってしまいやすい。人を活かすためには自分の短所をさらけ出す勇気を上司が持つことが、ものすごく大事な組織上の仕事の仕方であります。せっかく人を雇ったのだから、もっともっと部下に仕事をしてもらわなければならない。部下に仕事をしてもらうためには、自分ができることでも「俺は苦手だ」と言ったりして、部下にやってもらって、そして「君はすごいね」と言って褒めてあげる。そういう部下の力の使い方、部下の成長のさせ方を覚えていかないといけません。そのためには、自分の短所を全てさらけ出して、そのことによって部下に仕事をしてもらう、助けてもらう。**

**多くの人は自分の短所をさらけ出したら「バカにされるのではないか」と思ってしまいやすいんですけども、そうではなくて、自分の短所をさらけ出して部下に仕事をしてもらって、部下を褒め称えればかえって部下はその上司を尊敬してくれます。だけども、大事なことは短所をさらけ出すだけではバカにされてしまう可能性もありますので、皆長所も半分はありますからね。何かひとつぐらいは、どんな人からでも尊敬できるような力をつくっておかないと、上司としての役割を果たせません。何かひとつぐらいは他人から一目置かれて尊敬されるというものなかったら、やはり短所をさらけ出すだけではバカにされます。できるだけ短所をさらけ出す努力をすることが、ものすごく謙虚な人間の生き方として大事な力なんです。さらけ出す力というものをもっともっと我々はつくっていかなければならない。**

**子どもを育てる場合でも、お父さんお母さんがその子どもに「お父さんはこれが苦手だから助けてくれないか」と言うと、子どもは喜んでお父さんお母さんのお手伝いをするわけであります。そのようにして大人がすることを子どもにさせて子どもを育てていく。いろんなことができる子どもに成長させていくわけなんですよ。最近はそういう子どもの育て方があまりなくて、勉強さえしていたらいいと、家庭のことを何もさせないで勉強ばかりさせているから、家庭崩壊になってしまう。団結力のない家ができてしまうわけであります。そういう意味でも、もっともっと我々は長所と短所という半分ずつあってなくならないものをどのように活かして、どのように使いこなすかということをもっともっと真剣に考えていかないと、謙虚さが滲み出てくるという温かな美しい人間性というのはできてきません。**

**とにかくどんな人と会う場合でも、人間には必ず長所短所が半分ずつある。相手の短所を見始めたらもう好きになれない。人間と付き合う場合には相手の中に半分ある長所をできるだけ発見する努力をして、長所を見つめながら付き合うという付き合い方を覚えていかなければなりません。短所の部分は助けてあげよう、助けてあげなくては、助けてあげたい、そういう優しい愛の心を持って相手の短所に対応していく。ということをしていくのが基本であります。そして相手のいいところを積極的に見つけ出して褒め称える。人間性は長所半分短所半分という構造でできているんだという自覚が、謙虚さとして命からにじみ出てくるという構造をつくっていく。そういう重要な基本原理であります。もうひとつ、謙虚さが滲み出てくるという状態に持っていくための原理は、理性の謙虚な使い方ということにあるんですけど。今ちょうど4時半ですので、ちょっとこれから休憩を入れて後半のはじめにその話をしたいと思います。どうもありがとうございました。**

**後半の話に入ります。**

**先ほどは、謙虚さが滲み出てくる人間性をどうつくるのか。そのためにはふたつの重要な原理があるとお話しました。ひとつは、人間は長所半分短所半分。その構造をどう活かし、使いこなすか。その努力を通して謙虚さが滲み出てくる人間性が出てくる。もうひとつは理性の問題。理性の謙虚な使い方を覚えていかなければ、これからの時代、本当に心温かな仕事の仕方をしていく人間性をつくっていくことはできません。とにかく、これまでは理性というのは信頼できる能力だと我々は考えて、理性能力を成長させる勉強をしてきたわけです。だけども、理性を信じて今日まで生きてきた結果が、環境破壊、自然破壊、人間性の破壊という大きな問題をつくり出してしまった。この事実に直面してようやく人類は、これからも理性を信じて頼って生きていってもいいのか。という反省するような状況になってきているわけです。ようやく理性への絶対的信頼が揺らぎ始めた状況にあるわけであります。だけども、なかなか学校教育もそういう状況に対応できていなくて、まだまだ理性を成長させる教育しかできていないのが現実。けれども、社会の中では理屈ではない、心が欲しいという叫びが多くなってきて、社会の実態においては理性的な活動によって傷つけられ、苦しんでいる命をどう癒すか。そういうさまざまな事業、活動が全世界的に急成長しているのが現状であります。そういう意味においては、この時代の転換期に則して、理性とは何なのかを考え直してみる必要があるわけであります。**

**これまで理性というのは、合理的に考えることができる素晴らしい力だと言われてきたんですけど、私の感性論哲学では、理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力なんだという風に言っています。なぜ、そうなのか。それは、理性能力というものはどういう風に、実際に脳という組織の中に出てくるのか。という道筋を考えていきますと、理性という力が人間の脳に備わるためには、どういうプロセスが踏まれているかというと、まずは人間の脳が人間がつくった言葉を覚えなければなりません。人間がつくった言葉を脳が覚えて、それだけではまだ理性はできない。言葉と言葉を事実に合うように結びつけていくという作業することによって、合理的に考えるという力が脳に備わる。理性能力というのは、生まれながらに持っている力ではなくて、生まれてから後に人間の努力によってつくられていく力が、理性という能力なんですよね。だから、人間がつくった能力なんですから、人間と同じように、人間的な能力なので不完全だと。有限だと知る必要があります。どういう風に不完全なのかと言ったら、理性能力は言葉と言葉を事実に合うように結びつけていく作業をすることによって、出てくる能力が理性ですから、理性能力は原理的に言って言葉が持つ限界を背負っている。言葉の限界とは何なのかと言ったら、言葉によっては表現し尽くし得ないものがある。それを実態というように言うんですけど。言葉では実態を掴めない。言葉は抽象概念という言い方もされるんですけど、抽象概念という言葉ではそのあらゆるものの実態というものを掴むことができない。**

**実際問題、人間が実態を掴もうと思ったらどうするかと言ったら、座禅とか瞑想なんかで物事の実態に触れようという風に考えた場合、どうするか。とにかく、考えるな、と。黙って座っている。黙って座って考えないで、ただ呼吸をしている。そうすると、自分の命が宇宙と繋がっている。そういう実感にだんだんとなっていくことができて、その命が宇宙との繋がりを感じ始めて、そして自分の命と外の世界とが繋がっている…そういうところから、宇宙との一体感あるいは対象との一体感が感性で感じられて、そして悟りを開くという風な形になっていくわけであります。なぜ考えるなと言うのか。それは、考えたら言葉が出てくる。言葉が出てくれば、それは実態から離れてしまう。実態に触れようと思ったら、考えてはいけない。理性を使ったら実態が離れてしまう。考えないで黙って座っていろ、という修行の仕方をさせたり、あるいは滝行といって滝に打たれて何も考えないで、ただただ滝に打たれて無念無想になっていく。そういうことの中から、自分の命が水と溶け合って、そして大自然の中に融合していく。そういうところから、そういうことをしなかったら出てこない力が湧いてきて、超能力を獲得する。そうして、人間の命は宇宙と一体化し、自然と一体化して、物事の実態を知るという状況の悟りが開かれることになるわけであります。そういう意味でも、言葉は実態を掴めない。言葉によっては、表現し尽くし得ないものがある。ここに言葉の限界がある。限界になる言葉を結びつけることによって出てくるのが理性ですから、理性は言葉が持つ限界を背負っている。その言葉は人間がつくったものだから、だから言葉も不完全である。であるがゆえに、理性も不完全だ。理性にも限界がある。そう言えるわけです。そういう意味で、理性能力というのは合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だという風に言うことができるわけであります。**

**もうひとつの理性が不完全な理由は、人間はイコール理性ではない。人間は理性もあるけど感性は肉体もある。人間というのは理性と感性と肉体が有機的に絡み合ってできている命。だから人間というものを理解するためには、理性だけでは偏っているというか、理性だけでは分からないわけであって、理性も感性も肉体も3つのものが絡み合って人間という命をつくっているんだから、理性能力というのは、人間の持っている能力のひとつに過ぎない。だから理性能力は人間から言うならば、その人間の中の一部分であるから、だから決して理性的に考えて人間のことが全て分かるわけではない。人間には、理屈を超えた感情がある。人間には理屈を超えた欲求がある。また体験というのは理屈を超えたものであって、どれだけいろいろ知識を持っていても、いろいろ知識を持っていても「行ってきたら、こうだった」と言われたら、「そうだったんだ」と認めざるを得ない。そういうこともあって、体験というものもまた感性の世界の感情、欲求というものも理性以外の要素が人間にはたくさんあるんだ。理性だけでは人間を理解することができない。理性だけでは人間の問題を処理することができない。感情や体験、そういう肉体的な要素と感性の要素というのをちゃんと絡み合わせながら人間の問題、社会の問題には対応していかないと、本当の解決はできない。理屈だけでは世の中の問題を処理できない。そういうことが沢山あるわけであります。そういうところからも、理性能力は人間の持っている能力能力のひとつに過ぎないんだから、理性は不完全だ、有限だと言うことができるわけです。**

**だけど有限、不完全ということは、理性は間違ってるんではない、正しいんだ。だけど、それは理性的に正しいだけであって、人間的に正しいかと言うと、そうではない。理性で考える分には、理性的に正しいと言えるんだけど、人間的に正しいこととは違う。そういうところに理性の限界があるわけであります。だから理性は間違ってるんではない。理性の考えたことは理性的には正しいんだけど、人間的に正しいかどうかは分からない。そういう限界、不完全さがある。そういう理性能力を我々はどういう風に使って、これからを生きていったらいいのか。ということを考えることによって、人間は謙虚さが滲み出てくる。謙虚な生き方ができる自分ができていくことになるわけであります。そのためにはまず理性能力は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だと知る必要がある。理性は合理的にしか考えることができないということは、理性に対するマイナスの評価であって、どんなものにもプラス面がある。では理性のプラス面とは何なのかと言ったら、それは、理性は本当のことも言えるけど、嘘も言える。というところにプラス面がある。理性は嘘も言えるところに理性の積極的な価値があるわけであります。これはどういうことなのかと言ったら、本当のことを言うということは事実にあったことを言う訳であって、事実にあったことイコール現在と過去しかない。ところが、理性は事実ではないことも言うことができる。理性は、本当のことを言う力も50%あるんだけども、嘘が言える力も50%ある。嘘が言えるとは、理性は事実に縛られていない、事実に拘束されていない、事実に支配されていないという領域を50%持っている。**

**理性は事実に拘束されていない、事実に支配されていないから何ができるのかと言ったら、まだ事実になってない未来に対応できる。未来に対応できる。未来のことを考えることができる。未来のことを考えると、何が出てくるのかと言ったら、希望が出てくる、夢が出てくる。希望や夢や目標や理念や理想が出てくる。ここに理性の積極的な価値がある。だけども、夢や希望や理想や目標とは何なのか。それは「絶対こうだ」ということではなくて、理想とか夢というのは今よりもより素晴らしいこと、今よりもより良いことなんだ。と考えていくと、理性能力というのは、より良いことを考えることができる力であって、「絶対こうだ」とは言えない、そういう能力なんだと言うことができるわけであります。理性能力は合理的にしか考えることができない能力だけど、より良いことを考えることができる。そこに理性能力の本当の在り方があると考えなければならない。**

**そういうことが分かってくると、自分がどんなに理性で正しいと思っても、それは決して完全ではない。絶対ではないのだから、自分と違った考え方の人に出会ったならば、自分の考えで相手を説得するのではなくて、自分の考えは不完全なんだから自分と違う考えから何かを学んで、自分の考えをより良い考え方に成長させよう、と。という風に思わないと、理性を正しく使っているとは言えないんだ。でも、自分と違った考えに出会ったら、ムカついたり、相手を否定したり、対立したりするのではなくて、自分と違った考えから何かを学んで、自分の考えをより良い形に成長させるという理性の使い方をしていかなければならない。自分と違う考え方から何かを学んで、そして「君と出会えてよかった。君と出会えて君からこういうことを学んで、僕はこんなことに気づいてこんなに成長できました。ありがとう」と言って、自分と違った考え方の人に感謝ができる。これが理性の謙虚な使い方。**

**これは具体的に言うと、さまざまなバリエーションがあって、理性的に考えたら間違ったことを言っているのでは、という人もいるんですよね。だけど、それを理性の立場から「君の考えは間違っている」と言ってしまったら、その人は本当の現実が見えない人間になってしまう。現実には間違ったことを言う人もいるし、また偏ったことを言う人もいるんですよね。だけども、間違ったことを言う人は、本人は正しいことを言っていると思っているんですよ。また偏ったことを言う人も本人は偏っていないと思っているんですよ。こちらから見たら間違っているし、そう見えるだけの話なんだ。だから、自分の立場から見てその人の考えは間違っていると言ってしまったら、それは残念ながらそういう考え方を持っている人の存在を認めない、ということになってくるから、生きた現実が見えなくなってしまう。本当に我々は謙虚な生き方をしようと思ったら、自分の立場から間違ったことを言っているという風なことを言う人が、どれだけいるのか。また自分の立場から言って偏ったことを言ってるという風なことを言う人はどれだけいるのか。そのことを知って、そして自分の立場から考えて、間違ったことを言ってるという人には、どういう風に対応していったら、その人と仲良く生きていくことはできるのか。また自分の立場から、偏っていることを言っている人も現実に存在するんだから、そういう人とどういう風にやっていったら仲良く生きていくことはできるのか。そのことを考えていかないと、本当の人間らしい血の通った温かな心を持った生き方はできません。すなわち、間違ったことを言っている人から学び、偏ったことを言っている人からも学ぶ。そして、そのことによって生きた現実というものを知ることが大事なんです。ということは、自分が理性で考えて正しいと思っていることは、決して完全ではない。**

**だから、自分が間違ったことを言っていると思っている人から自分を見れば、自分が間違っているわけです。自分の考えも絶対ではないんだ、完全ではないんだ。間違ったことを言っている、偏ったことを言っていると言う人と、自分の考えは対等でどっこいどっこいなんだ。いろんな考え方があるということを認めることができなかったら、その人は人間ではない、単なる理性だ。いろんな考え方をする人がいて、いろんな価値観を持っている人がいて、そしていろんな考え方やいろんな価値観から自分が学んで、そして自分の考え方を成長させていく。あるいはいろんな考え方の人とどういう風に付き合っていったら良いのか、ということを考えていって、そして相手から学ぶものがなかった場合には、こういう考え方の人もいるんだという現実を肯定して認めて許す。現実とはこういうものなんだということを相手は自分に教えてくれているんだという受け止め方をしていく。ということによって、自分の考えを相手に押し付けない。謙虚な心温かな生き方ができる。これが個性の時代というものを生きる基本であります。個性の時代というのは、いろんな考え方があっていいんですよ。いろんな価値観があっていいんですよ。ある特定の立場から自分と同じものではないものを間違っているとか偏っていると言うのは、これは傲慢な態度なんです。いろんな考え方があるというのは、個性なんですよ。そういう個性を持った人間の集まりが会社なんですよ。**

**いろんな考え方があって、いろんな立場があって、いろんな価値観があって、そういう人たちがお互いに良い意見を交わし合う、そのことによって多面的にものが見えてくる。自分の考え方だけで事を進めていくのではなくて、いろんな考え方の人がいることを現実に知ることによって、現実に対するより的確な対応の仕方ができてくる。そういう考え方を持っている人には、どういう風に言ったら分かってもらえるのか。ということで、自分の人間性の幅ができていって、人間性が豊かになる。人間性の豊かさは、自分と違った考え方や価値観を認めて許すことができる状態が、人間性が豊かだと言えるんです。人間性が貧しいというのは、自分の考え方以外の考え方は認めない、許さない、それが人間性が貧しいということなんですよ。こういうことは、これまで理性という能力を信じて真理はひとつだと言ってきた人間には、なかなかできない、なかなか認められない難しい生き方です。だけども、これからは真理はひとつではないんですよ。いろんな考え方があっていいんですよ。それこそ個性の時代なんですから。**

**実際問題、これまでは学問においても永遠に変わらない真理があるんだと思って皆研究してきたんですよね。皆、理性的に考えて、これが真理だと思って発表してノーベル賞をもらってきたんですよ。どんな真理でも何年か経ったら全部嘘になるんですよ。それが学問の進歩。真理が永久に真理だったら、学問は成長しないというか、進歩しません。学問が進歩するというのは、昨日まで真理だったものが今日は嘘になるから、学問は進歩するのですよ。だから、学問が進歩するということ自体が、真理は存在しないということを証明しているんですよ。学問が進歩するということ自体が、理性能力は不完全だ。理性で考えたことはあてにならん。ということが学問の進歩が証明しているんですよ。だから我々はいつまでも理性を信じていたのではいけない。どれだけ正しいと思っても、理性はあてにならない。間違ってはいないけど完全ではない。どの人の考えも間違ってはいないけど、完全ではない。皆、欠けたるところがあるんだ。だから、いろんな人から学ばなければならない。そして、いろんな考え方の人を理解して、そしていろんな考え方をどういう風に現実の仕事の中で使って活かしていったら良いのかということを考える。それがこれからの個性の時代、皆違った考え方を持っていてもいいという時代を生きるために必要な理性の使い方なんです。これはなかなか今の理性教育を受けてきた人たちにとっては、難しい。そう簡単にはできない。これから我々の時代生きていこうと思ったら、謙虚な理性の使い方をして、いろんな考え方が認められる人間にならないと個性の時代は生きられません。これをしないと、個性を認めないという生き方になってしまいますから、それはこれからの時代にはしたらいかんのですよ。自分の考えで皆を説得してはダメ。自分と違う考え方から学んで、自分を成長させていくのが、より良いことを考えることができる能力を持っているということの価値です。意味です。なかなか難しいですよ。**

**違う考え方の人と仲良く生きていく。でもこれができなかったらね、離婚の激増は止まりませんよ。戦争はなくなりませんよ。自分と違う考え方の人と仲良く生きていける力ができなかったら、宗教戦争はなくなりませんよ。民族戦争はなくなりませんよ。幼児への虐待もなくなりませんよ。自分と違う考え方の人と仲良くやっていける力がなかったら、今のままでずっと社会は進んでいく。近代のまま。だけど、理性の時代である近代を抜け出して、そして新しい感性の時代に入っていって、感性=個性ですから、皆で個性を認め合いながら、人間性の豊かな時代を生きる力をつくっていこうと思ったら、考え方が違ってもいい、価値観も違ってもいい、宗教が違ってもいい、立場が違ってもいい、そういう状態でどうしたら皆と仲良く生きて社会秩序をちゃんとつくっていけるのか。その力をつくっていかないといけない。そのために要求されるのが、謙虚な理性の使い方なんだ。理性は合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力だ。だけども、理性はより良いことを考えることができる力だ。だから、自分の考えは不完全なんだから、いろんな人から学んで自分の考えをより良い考えに成長させていこう。結局、絶対的な考え方はないんだ。より良い考え方しかないんだ。お互いにより良い考え方をつくっていくために、皆から学び合う。そういう気持ちが基本的に皆が個性を持ちながらも仲良く生きていく秩序をつくる基本的な心情なんだ。どんな考え方も否定しない。全ての考え方を許す。そしてお互いに学び合いながら、自分の考え方を少しずつ成長させていく。自分の考え方が批判されたら、批判されたことによって、そういう批判をどういう風に乗り越えていったら良いのかを考えて、「君に批判してもらったから僕はこんなに成長できました。ありがとう」と言って自分を批判した人に感謝をする。「君が批判してくれなかったら僕はこんなに成長できませんでした。君が批判してくれたから僕はこんなに成長できました。ありがとうね」と言った相手に感謝をする。そうしたら喧嘩にはなりません。だんだんだんだん自分の考えが高度になり、厳密になって、お互いが学び合いながら成長していける。そうなってくると、考え方が違っても一緒にやっていける。許し合うというかそういう気持ちがだんだんできてくる。お互いが個性を認め合いながら、この場合は君の考え方でやった方がいいと思うから君に頼むよ。この場合は僕の考え方でやっていた方がいい方向に進んでいくと思うから、僕のやり方でやってみるよ、と。どんな人の考えも絶対はないんですから、もし間違っていたり、問題点に気づけずにいたら教えてねと言って、自分と違う考え方の人にそういう自分の足らないところを指摘してもらえる、そういう役割を果たしてもらえるようにお願いする。そういうのが謙虚な理性の使い方なんですよね。**

**そういう風な理性の使い方をまだ我々は習ってないし、学校では真理はひとつだと習ってきていますので、なかなかいろんな考え方を認めて許して一緒に生きていくということは、現実の段階ではできません。だけども、我々がどうしてもこれから是が非でも生きていかなければならない世界が、個性の時代なんだ。確実に個性の時代はやってきているんだ。その個性の時代を生きようと思ったら、どうしても謙虚な理性の使い方ができなければ、自分は苦しまざるを得ない。個性の時代に対応した理性の使い方ができる人間だけが、これからの個性の時代において活躍して羽ばたける。そういう意味で、是非謙虚な理性の使い方を日常生活や仕事の中で駆使できて、それが使いこなせるように努力してもらいたいし、頑張ってもらいたいんですよ。そうしたら自分が幸せになりますよ。自分と違った考え方の人と対立しないでありがとうと言えるんですから。自分が幸せになるし、また相手を幸せにしてあげることができますよ。それができたらはじめて離婚の激増は止まりますよ。性格が違っても考え方が違っても感じ方が違っても一緒にやっていける、となってようやく止まるんですよ。宗教戦争もなくなりますよ。皆、人間は不完全だとなれば、お互い学び合うことになりますから。初めてそこで宗教戦争・民族戦争・イデオロギー戦争もなくなるんですよ。そのようにして平和な家庭、平和な組織、平和な世界をつくっていくというのが、これからの時代の流れですよ。必ずそういうことは要求される状況にどんどんどんなっていくんですから、早くそういう力を自分のものにしていかないと、本当のこれからの時代を生きる人間になれません。**

**いつまでも自分の考えで相手を説得して、同じ考え方の人間をたくさんつくっていくという風な近代的な、真理はひとつという理性的な生き方をしている限り、戦争は絶え間なく続きますよ。離婚の激増は無くなりませんよ。一生不幸な生き方しかできないですよ。ちょっとした違いで喧嘩をするような、相手を不幸にしてしまうような人間になってしまいますよ。本当に不完全な人間が幸せな人生を送っていこうと思ったら、個性を認め合うしかないんですよ。そのために謙虚な理性の使い方が必要なんですよ。こういう理性の使い方を覚えると、本当に謙虚さが滲み出てきますよ。本当にどういう状況であっても、謙虚な対応の仕方ができるという状態の人間性ができ上がってきます。自分と違った考えや価値観や感じ方や立場や宗教や文化というものを否定しないで、そこから何かを学んで自分を成長させる。相手から学ぶことによって自分の人間性の幅ができていくということに喜びを感じるような人間になっていかなければなりません。そして、自分と違った考え方や自分と違った価値観の人を使いこなして活かしてあげて、そして統率していくことができる上司になっていかないと、組織というものを本当に活力のあるものにしていくことはできません。これは口で言うのは易しいけども実践するのは難しいと思うんですけどね。難しくても挑戦していくしかないんですよ。もう個性の時代なんですから。そういうことができれば、どんなに素晴らしい組織ができるか、どんなに和やかな家庭ができるか、それを是非考えてみてもらって和やかな家庭、活力ある組織をつくっていくために、ぜひその力をどうしたら自分のものにしていくことができるか、ということをよくよく考えてみてもらいたいと思います。不完全性の自覚から滲み出てくる謙虚さというものをつくることが、まず人間の格というものをつくり上げる最も根底にある原理です。人間の格というものは謙虚さだけではまだできません。あと2つ、全部で3つの原理が揃わないと、人間の格は整いません。謙虚さだけではまだ1/3。あと2つのものが加わって、人間の格というものは整ってきます、**

**では、あと2つは何なのかと言ったら、まずは不完全性の自覚なんですけども、だけども「俺は不完全だ」ということは意識できるということは、完全なるものをイメージすることができなかったら「俺は完全ではない」とは意識できませんから。だから、人間というのは完全なるものを意識しながら生きることができる存在であるんです。人間は不完全なんだけど、常に完全・完璧・絶対を求めるという意識がどうしても出てきてしまう。だけども、大事なことは完全にはならん、絶対にはならん、ということが、人間の限界であります。だけど完全にはならないのだけど、完全を求める…これをどういう風に表現するか。より以上を求めて生きるという生き方になるわけです。より以上を求めて生きる生き方は人間しかできない、神にも動物にもできない人間特有の人間の格をつくっていくための重要な条件であります。人間は何らかの意味で、より以上を求めて生きる。より素晴らしいものを求めて生きる生き方をしないと、人間の格があるとは言えない。人間の形をしていても、努力をしない、頑張らない、より以上を求めていくという成長意欲がない状態というのは、人間でありながら人間の格のない生き方をしている偽物だ。**

**なぜ、より以上を求めて生きるということが人間にとって大事なのか。価値を求めて生きる。より素晴らしい、より以上の価値を求めて生きる。これがなぜ、人間が格をつくっていくための第二番目の条件なのか。それはより以上求めて生きるということは、神にも動物にもできない。神はもう完全、絶対なのですから、より以上を求めて生きてごらんと言われても、神様困りますからね。もう絶対、完全なんだから。より以上をどうしたらいいの、となってしまう。神様を困らせてどうするんだ。残念ながら神は完全、絶対という存在。固定されてしまっていて上にも下にも行けないような、かわいそうな存在なんですよ。人間だけが不完全でありながら完全なるものを求めて生きるという、自由度のある世界に住んでいる。動物は、人間と同じように不完全な存在なんだけど、完全なるものをイメージする力がないから、不完全でありながらもより以上を求める、もっともっと良くなりたいという気持ちは湧いてこない。神にも動物にもより以上を求めて生きることはできない。人間にしかできない。だから人間にしかできないことをせずして、どうして人間として本物と言えるのか、ということになってきますよ。人間が本物と言われるためには、何らかの意味でより以上の価値を求める。すなわち、より以上のものを求めて、より以上を目指して生きる生き方から、人間的な生き方として考えられなければなりません。**

**もうちょっと分かりやすく言うと、動植物というのは与えられた現実に適応、対応する生き方しかできないんですけど、人間だけが与えられた現実をどう変えて、どう素晴らしいものに変えていくか。これは人間だけができるように、人間的という生き方の重要な原理があります。人間だけが与えられた現実をより素晴らしいものに変えていく生き方ができるんだ。だから歴史がつくれるんだ。動植物は自らの力で歴史をつくれませんけど、人間は自らの力で歴史をつくって、そして文明をつくり、文化をつくる活動ができることになるわけであります。人間である限りは、常により素晴らしい価値を追求する。より良い未来を求めていく。より以上を求めていく。そういう風な活動をする必要があります。そういう活動するために、大事な原理が3つある。**

**より以上のものを求めて生きていこうと思ったら、基本的に人間であるなら、理想がなければならない。未来に理想とか夢とか希望とか目的を掲げてなかったら、人間とは言えない。人間的な生き方をしているとは言えない。理想がなかったならば、何がしたいのと言われても、「いや、別に対して何もしたいことはありません」「まあ適当にやっていたらなんとかなるんではないの」と、流される生き方になってしまうんだ。自分で自分の人生をつくっていく力を持てない。理想があって初めて、その理想を実現するために「今、俺はこれをするんだ」という、そういう自分で自分の人生をつくっていく生き方ができるわけです。だから、人間が人格のある人間の格のある生き方をしようと思ったら、なんらかの意味で未来に目標・理想・夢を掲げる必要がある。夢さえあれば、人間はいかなる苦しみにも耐えられる。夢がなくなってしまったら、現実の辛さに押しつぶされてしまって、絶望してしまう。人間が本当に人間的な生き方をしようと思ったら、常に自分の人生の未来に何らかの意味で目標・理想を掲げなければならない。人間的と言われる人間の格のある生き方にはならない。人間でありながら、人間の格のない生き方をしている人がいっぱいおります。本当に人間の格があるなという生き方をしようと思ったら、まずは未来に夢・希望・目的というものを自分で設定して、それを実現するために今を生きる。そういうことをしていく必要があるわけです。**

**第二番目に大事なものは、問題意識を持つこと。問題、問いを持つこと。これらを持たないと、より素晴らしい未来をつくることができません。問題がないということは、現状で良いということになりますから、発展成長はありません。問題を感じる、問題持つことによって初めて我々は現実を動かし、現実をより素晴らしいものに変えていくという努力をすることができます。感性は問題を感じる力である。感性が問題を感じるのは、より素晴らしい未来をつくるために理性を働かせるためなんだ。感性が問題を感じないと、理性は積極的に働きません。問題がないと考えません。だから、理性に考えさせるために感性は問題を感じるんです。感性がある限り、我々は常に問題を感じなければならない。常に現実は不完全だから、常に感性で問題を感じて、その問題をどうしたら理性で解決することができるかということ考えていく。だけども、理性は絶対こうだ、という答えは出せない。より良い答えしか出せない。だからより良い答えを出しながら、人間は成長する。そして歴史がつくられていく。それでいいんだ。とにかく、より以上求めて生きる、より素晴らしい価値を求めて生きる、より以上を求めて生きるという人間にしかできない生き方のためには、理想が大事だ。問いが大事だ。**

**人間としてもっともっと成長したいという人間としての成長意欲がなかったら、人間ではない。人格はない。人間としてもっともっと成長したいという意欲があって、はじめて人間の格のある生き方ができる。人間としてもっともっと成長したい、人間としての成長とは、能力の成長と人間の成長という両面があるわけです。常に我々は、その能力においても人間性においても、もっともっと成長したいな、という気持ちを持っている限り、人間の格のある生き方をしていると言えるんです。能力においても人間においても成長したいという意欲がなくなったとき、その人の生き方は動物に脱した。すなわち、人間でありながら動物と変わらないような生き方をしているという風に言われることになってしまいます。とにかく、人間である限り、人間の格になる生き方というものをすることが、人間の命に課せられた責任とか義務みたいなものですよね。そういう意味で、母なる宇宙の期待に応える人間としての人間らしい生き方をしようと思ったら、理想を持ち問いを持ち、人間としてもっともっと成長したいという気持ちが、人間の格のある生き方をつくってくれるわけです。これが第二番目の人間の格をつくる原理である、より以上を求めて生きるという条件です。謙虚さと成長意欲。**

**第三番目の人間の格をつくる条件は何なのか。人間は社会的存在という風に言われて、社会を離れて人間にはなり得ない。人間の子どもに生まれてきても、狼に育てられたら狼少年ケンですから。人間の子どもに生まれてきて、人間の社会の中で人間の手によって育てられて、初めて我々は人間になることができる。だから、人間は社会的存在である。社会的存在であるとどういうことなのかと言ったら、社会というものの中で一番根底に働いている原理は、社会の最も根底にある原理は、自分の価値は他人が決定するという原理であります。自分がどんなに素晴らしい能力を持っていても現実の社会においては、他人から評価されなかったら一文の価値もない人間なんだ。他人から評価されて、初めて現実を生きることができる。それが現実の社会の厳しさ。他人から評価されなければゼロなんだ。だから現実の社会が持っている一番厳しい原理は、自分の価値は他人が決定するということ。であるがゆえに、我々は人の役に立つ人間になる。人の役に立つ生き方をする。これが、どうしても社会においては求められる。人の役に立つことをしなかったら金が入ってこない。人の役に立たないようなことをしていたのでは、金をくれない、給料をくれない。そう考えていくと、人間性というものをつくっていくための第三番目の条件は、人の役に立つ事を喜びとする感性。これがなかったら人間ではないという風に言うことができる。人の役に立つことを喜びとする感性とは、愛だ。愛がなかったら人間ではない。他人の役に立って嬉しいという心情。これはあらゆる職業にも必要である。職業は愛の実践だ。人の役に立って嬉しい、その精神がなかったら仕事で成功することはできない。人の役に立つものをつくるので、初めて相手から金がもらえる。相手に喜んでもらえないようなものをつくったり、そういうことをしたんでは金は貰えません。就職するのでも、人に自分の価値が認められて、他人から評価されて初めて就職もできるわけなので、他人から評価されなければ就職もできませんから。社会は、自分の価値は他人が決定するんだ。他人に評価されなかったら一文の価値もない人間だ。それが現実の厳しさ。そういうところから、我々は人の役に立つことを喜びとする感性という愛を、人間性の中に持たなければならない。**

**これは現実的にはどういうことになるのか。職業というものは、すべて人の役に立つものをつくって自分が金をもらうという形で成り立っている。全ての職業というのは、基本的に人に喜んでもらえるような仕事の仕方をするということが、全ての職業の基本原理です。人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしていたのでは、注文が来ないし、勝手なことをやっていたのでは会社を辞めさせられてしまいます。だから、職業とは人に喜んでもらえるような、人の役に立つような、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができることが職業、プロというものの基本的な力です。だから全ての職業は、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間をつくるというのが、プロとしての仕事が持っている社会的意味なんです。職業とは何なのか。職業とは、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に成長させるもの。そのために存在するのが職業である。と、我々は考えて、仕事を通して自分の能力と人間性を成長させるという生き方をしていかないといけない。そうしないと、社会的に本物の人間と言うことができるような存在にはなりません。**

**人間が本物と言われるような、人間の格がある生き方というものができるという状態になるためには、まずは謙虚さが要求される。その次は成長意欲が求められる。最後は愛が求められる。謙虚さと成長意欲と愛、この三つが揃って、初めて人間の格というものが現れ出てくるわけです。人格をつくるということは、そういうことを念頭に置きながら生きること、努力をすること、それが人格をつくるという道筋になっていくわけです。これからは仕事を通して、自分自身を人間として本物という風に言うことができる存在に成長させていく、ということがすべての職業人に課せられた重要な目標となってきます。金を目的に働くのではなくて、自分を本物の人間に鍛えるために我々は就職するんだ。仕事をするんだ。と考えなければなりません。なぜ実業に携わるという、就職してプロとしての仕事をするということをしていかないと、社会人として本物という人間になれないのか。それは人間が本物になるためには何が必要なのか。人間と社会の実態に触れることが、人間が本物になる基本原理です。**

**人間と社会の実態に触れるとは。社会とはどんなに恐ろしいのか、どんなに醜いのか、どんなに怖いのか、どんなに素晴らしいのか、社会の本当の恐ろしさ、本当の怖さ、本当の醜さ、本当の素晴らしさに命が触れて、初めて人間は社会的存在として本物になる。また人間の恐ろしさ、人間の醜さ、人間の怖さ、人間の素晴らしさに命が触れる体験をもって、初めて人間は本物になるんだ。人間と社会の本当の恐ろしさと本当の素晴らしさに命が触れて、初めて人間は人間としての本物になります。実態に触れなければ本物にはならないんですよ。理性では絶対に触れられませんから、理性的にどんなに頭が良くても偽物です。本当の社会の現実と言うか、本当の社会の恐ろしさや醜さ素晴らしさというものに命が触れることによって、初めて命は本物・実態と触れることによって本物という状態に成長していける。命の痛みを伴った体験なしには、人間は決して実力を伴った本物性というものを持つことはできません。**

**どうしたら一体我々は、人間と社会の本当の恐ろしさを知ることができるのか。どうしたら我々は人間と社会の本当の醜さを知ることができるのか。どうしたら我々は人間と社会の本当の素晴らしさを知ることができるのか。そのためにはプロとしての仕事を持って、弱肉強食利害打算の働く娑婆世界の中で、人生を懸け生活を懸け命を懸けて働く。そのときに初めて我々は本当の社会と人間の恐ろしさと本当の社会と人間の素晴らしさに命が触れる体験を持つことができます。命は磨かれていって、そして実力を伴った人間性、人間らしい心を持った存在に我々は成長することができるわけであります。本当の命の辛さ、苦しみ、俺の人生の地獄かと思うようなものを体験して、そこから這い上がってきて初めて、命本来の輝き・強さを持った実力というのができ上がってくるんです。命の痛みを伴った体験なしには実力はできない。そのためには、人間は不完全ですから、また人生はさまざまな問題や悩みが繰り返し繰り返し、次から次へと出てきますので、そういうものを決して避けずに逃げずに、次々と出てくる問題や苦しみや悩みを乗り越え続けていって、どれだけ失敗しても決して諦めない。良い結果が出るまで諦めないという生き方を覚えていかないと、なかなか実力を伴った本物の人間はできないんですよね。**

**骨身に染みる体験というものが、命の痛みを伴った体験と言えるものなんですけど、地獄を体験してその地獄から這い上がって来る…困った状況に陥ってもそこから這い上がってきて、そして良い結果が出るまで努力を止めない。そして良い結果を出せる、そこまで問題を乗り越え続けながら生き抜いていく。そのプロセスが実力をつくるということになってくるわけなんですよね。問題には必ず答えがある。答えのない問題はない。答えというのは素晴らしい答えもあれば、レベルの低い答えもある。レベルの低い答えを出している間は、なかなか問題が乗り越えられない。でも、必ず問題は乗り越えられるんだ。必ず問題は自分の潜在能力を引き出すために出てきてくれてるんだ。問題には答えがあるんだ。必ずうまくいくんだ。乗り越えられない問題はないんだ。だから乗り越えられるまで努力を辞めない。そういう人間だけが成功を手に入れることができる。また幸せを手に入れることができる人間なんです。どこまでその問題や苦しみや悩みの連続に耐えられるか。そこが本物になれるかどうかの大きな分かれ道です。結果が出るまで止めない。失敗しても失敗しても、とにかく上手くいくまで止めないという努力によってしか、不完全なる人間における実力というものはつくられません。希望は、問題には答えがあるということなんですよ。そして、解決できる問題しか出てこないんですよ。問題が出てきたときから、その問題には答えが既にあるんです。**

**その時代にはその時代に相応しい問題しか出てきません。人生においても、今出てきている問題は今の自分の年齢に相応しい問題なんですよ。問題もちゃんと時と場所を選んで出てきてくれるんですよ。そのようにして自分を成長させてくれるために問題は出てくるんです。乗り越えられない問題はないんです。途中で止めなければ、必ず問題は乗り越えられるんですよ。失敗しても失敗しても、より良い答えを出し続けるという努力をすれば、必ず問題は乗り越えられます。それが不完全なる人間における成功と幸せを掴み取る道筋なのですから。我々の命には問題を乗り越えていくための答えが全部詰まってるんですよ。生まれながらに答えは命に与えられてるんです。それを潜在能力と言うんですけどね。問題というのは、その潜在能力を引っ張り出すために出てくるわけですよ。今自分の持っている力では何ともならんという問題が出てくることによって、新しい潜在能力が引っ張り出されてきて、自分は成長するんだ。だから、問題が出てきたときから、もうその答えは命に内在しているんだ。その命に内在している答えが出てくるまで、何回も何回も失敗しながら、うまくいくまで止めないという生き方ができる人間だけが成功できる。そういう人だけが幸せを手に入れることができる。そういう風に人間の命はなっているんですよ。それが人間の格を備えながら、本物という状態に自分自身を成長させていく道筋なんです。**

**是非苦しみに負けないで、問題に負けないで、人生のさまざまな苦しい問題を乗り越え続けて、素晴らしい人生の果実をものにしてもらって欲しいと心から祈っております。皆この時代に生まれてくるからには、この時代において使命を果たして、自分なりの幸せと成功を手に入れることができるように命はちゃんと準備されているんですよ。だから、努力を止めなければ、必ずその成功と幸せを手に入れることができるように命はできております。命はそれを望んでるんですから。それは母なる宇宙の願いなんですよ。「皆幸せになってね」と言って送り出してくれたんですから。是非皆さん方も人間の格というものをつくる努力を通して、人生の成功と幸せを手に入れる人生を歩み続けてもらいたいと思います。今日はこれで終わります。どうもありがとうございました。**